

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 1 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530821

研究課題名(和文)聴覚障害幼児の手話の統語的ルールとしての格関係の獲得について

研究課題名(英文)The Acquisition of Syntactic Rules of Japanese Sign Language in Young Children

研究代表者

瓜生 淑子 (URYU, Yoshiko)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20259469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：公立ろう学校でも日本手話の早期導入が実践段階に入っている。研究では、ろう学校幼稚部において、個別指導場面での高度難聴幼児の自発的発話を分析した。その結果、年小クラス在籍時の自発的発話では、コード・ブレンディング発話が特徴的であったが、とくに、文末に<私が><私を>などを意味する指さしの付加が注目された。これは手話特有の表現であり、「主語」を明示する文法的マーカーだと言われている。日本語の話し言葉ではむしろ冗長ともいえる表現である。日本語音声言語と手話とのこのような不一致表現が見られたことは、この時期、2つのモダリティの言語がそれぞれ別々に獲得されて行きつつあることを示唆するものだった。

研究成果の概要(英文)：Study 1 analyzed utterances of a 3-year-old hard of hearing girl during tutorial sessions with her hearing teacher who could use sign language. The girl, who had severe hearing loss, could speak with natural intonation of oral speech with a hearing aid. Twenty-eight spontaneous utterances were obtained during about 40 minute session. Eight utterances were either oral or signed. Of other 20 utterances, 8 showed the perfect correspondence between spoken words and signs. The rest showed the difference between them. Among them 3 sentences accompanied a pointing at the end of them, which showed natural expression for sign language but was redundant and was unnatural word order for Japanese. These non-correspondent bimodal code-blending utterances suggest that for young deaf children who uses oral and sign modes, they may acquire two modes separately. Study 2 discussed the early childhood education and care for deaf children with sign language.

研究分野：発達心理学

キーワード：聴覚障害児 手話の早期導入 コード・ブレンディング 手話の統語構造 文末の指さし

1. 研究開始当初の背景

ろう学校では長らく口話法が採られ、手話は禁止されてきた。とくに早期からの手話使用は、(音声)言語獲得上、好ましくないと考えられてきた。しかし、言語学的分析を踏まえて手話を積極的に捉える Stokoe の提起 (1965) を受けて、Johnson et al. (1989) は「聴覚障害児にとってアメリカ自然手話 (ASL) が第一言語である」「自然手話獲得はできるだけ早く始めるべきである」として、口話法や「手話付き音声言語」を批判し、自然手話をこそ、学校・家庭で教育の基礎におくべきだと強く主張した。日本でも、この論文が契機となり、聴覚障害児教育の見直しを求める声が聴覚障害者や聴覚障害児を持つ保護者、ろう教育関係者たちから強くなった。日本弁護士連合会は、「親の会」の人権救済申し立てを受け、2005年に手話教育の充実を求める意見書を発表した。さらに、2006年には国連で採択された障害者権利条約において、「手話は言語である」ことが明記された。すでに90年代には手話を積極的に位置づけるろう学校が存在するようになったが、こうした人権擁護の動きと相まって、公立校のろう教育においても早期からの手話の活用は確実に実践の段階となってきている。

一方、北欧で開始された「バイリンガルろう教育」—第一言語 (L1) は手話で、書き言葉に直結する音声言語は第二言語 (L2) として獲得していくというモデル (いわゆるスウェーデン・モデル) にたつ—は、日本における手話の早期導入を後押しした理念・実践であるが、子どものニーズにあわせて聴覚活用や手話つき口話も認めていくという手直しが現地で始まっているという (鳥越, 2009)。その背景には、人工内耳装用手術の急速な普及があるのだが、豊かな第一言語を保障しても、第二言語である音声言語獲得は、口話法一辺倒の時代同様、容易ではないことが認識されてきたこともその一因である。

日本でも、教室への手話導入は子どもどうしの関係を確実に豊かで自然なものとしたと評価できるだろう。しかし、第二言語としての日本語獲得は引き続き大きな課題として残されている。

とくに、日本手話についてみれば、その言語学的分析はまだ始まったばかりと言っても過言ではなく、手話の文法的諸相が十分解明されているわけではない。ましてや、子どもの手話獲得については殆ど研究されていない。わずかに、0歳代の時期を対象とした武居らの研究 (2000) があり、言語獲得期の手話の活用が言語発達を促進する可能性を示したという評価もある一方、0歳の時期の手指の動作表現が「手話」と言えるのか、単なるジェスチャーに過ぎないのかなど、検討の余地を残している。一語発話期ではなく、単語を繋げて文を作る、即ち手話による統語

発話の事例を具体的に検討した研究—幼児期、とくに幼児期中期以降の子どもを対象とする研究—が求められている。

2. 研究の目的

手話が公教育においても幼児期から取り入れられるようになってきたが、保育にもたらした変化は具体的にどのようなものだったか、また子どもたちの言語獲得はどのようなものなのかについての具体的研究はなされていない。

話し言葉レベルでの手話の使用が聴覚障害幼児たちの発達や生活に寄与した点は大きいとしても、書き言葉の獲得に伴う困難—格助詞使用の不確かさ—は依然、ろう教育の課題となっている。手話を導入した保育の意義を踏まえたうえで、幼児の手話の統語ルールの獲得の研究がなされれば、音声日本語への転移を促進する教育プログラムが期待できる。

3. 研究の方法

手話の積極的使用を行うA県立B公立ろう学校幼稚部において、3年間の保育観察、及び高度難聴児ヤヨイの個別指導場面での観察を行い、ビデオ録画面像から、手話を導入した保育の分析と、ヤヨイの手話および音声言語の日本語の獲得の諸相を分析する。ヤヨイには半年ごとの語彙発達検査や「心の理論」の獲得を見る誤信念課題も実施した。

個別の対象となったヤヨイ (仮名) は、聴力損失程度は高度難聴だが、補聴器装用により、その口話表現には地域方言のイントネーションの特徴も見られる。両親はともに聴者である。このうち、母親の手話は、Sim-Com (Sign Supported Speech: 手話つき音声言語) の特徴が強い。一方、父親は日本手話を熱心に学習し、本児との会話では意識的に音声言語を排し、自然手話の使用を心掛けていた。ヤヨイは父母との会話において手話の使用の仕方を使い分けていた。

4. 研究成果

①保育の特徴について:

- ・口話法を中心とした保育では、教師と子どもが扇形に座した学びが中心だったが、Bろう学校では、文字通り「遊びを中心とした保育」に多くの時間が割かれ、子どもどうしが向かい合って遊び、教師たちは要所要所に位置取って適宜子どもの遊びに援助的にかかわっていた。

- ・縦割り保育も積極的に位置づけられていた。とくに昼食後の帰りの会までの自由遊びでは異年齢の子どもたちが園庭で一緒になって鬼ごっこなどで遊んでおり、日本手話伝承の場にもなっていた。

- ・「表現」領域が重視され、保護者作成の絵日記を翌日紹介しあうなど、絵による補助も活用しながら、伝え合う活動が取り組まれていた。読みなれた絵本をもとに劇を行うこと

はとくに年長児で日常的に行われ、手話・音声言語ともに乏しい子どもでも絵本場面の表現では、他児に劣らぬ理解力・表現力を示すことも見られた。

・指文字と指文字フォント・ひらがなの導入は、年小クラスの早い時期から行われていた。加えて、文字表記の際に格助詞に注意を向けさせることは年中クラス以降、本格化していた。

②「心の理論」の獲得：

標準的な誤信念課題（位置移動課題）と瓜生（2007）が作成したアンパンマン課題（アンパンマンを助けるために、バイキンマンにウソをつくことができるかを見る）によって、ヤヨイの「心の理論」の獲得を母親の手話を交えた教示により、半年ごとに検討した。アンパンマン課題は、4歳半を過ぎると通過し、その後、6歳まで安定した結果を示した。他方、誤信念課題は4歳時点で通過したものの、その後の通過は不安定であった。このことから、瓜生（2007）が指摘したように、誤信念課題では教示文の理解そのものに負担がかかっていることが示唆された。ヤヨイの語彙発達検査結果では生活年齢からの遅れがみられたが、アンパンマン課題の通過は聴児と変わらない結果であった。

③統語発達について：

ヤヨイの音声言語、手話の獲得について、その統語的側面から分析した。二言語併用児においては、コード・スイッチングやコード・ミキシングの存在が知られているが、手話と音声言語の併用においては、同時に2つの言語を使用することが可能なことから、コード・ミキシングの特殊形態であるコード・ブレンディングが知られている（澁谷，2012）。これは、signとwordが完全に一致して同時に使用される場合だけでなく、2つが時系列的に入り混じって相互補完的に使用される場合、同時に産出された単語の一方が他方を限定する場合（例：wordで<家>といい、signで<屋根>と表現する）などが知られている。

観察を始めたヤヨイの3歳後半の時期の担任の個別指導場面では40分間の間に28の自発的な発話が見られた。このうち、どちらか一方のモダリティによる単独発話は8発話（内、音声言語のみが6）、コード・ブレンディング発話は20発話だった。この20発話の内、完全にwordとsignが一致する発話は8発話であった。残る12発話は、単語レベルでの不一致があった。不一致表現について、Van den Bogaerde & Baker (2005)の分け方を参考に5つに分類した結果がTable 1である。

Table 1 バイ・モダルなセンテンスにおける一致・不一致表現（発話数）

文末の指さし	3
指さしが1つの項を表現する	5
同時算出されたsign/wordの一方が他方を意味的に補完	0
時系列的にsign・wordが産出される	4
その他	0

とくに、手話表現で知られている「文末の指さし」が付着する表現が特徴的であった（Table 2）。手話において、「指さし」は、「表情」「うなずき」等とともに、文法マーカーとして機能するとされる。とくに文末の指さしは、主語を明確化する文法マーカーとして機能している（武居他，1999）。

Table 2 文末に指さしが付加された発話の事例

a.	食べた	たこやき	φ	.
	<食べる>	<たこやき>	<自分を指さす>	.
b.	ワンワン	バチッたわ	φ	.
	<犬>	<噛む>	<自分を指さす>	.

Table 2の事例を見ると、文末の指さしがなくとも文脈から意味理解は可能で、日本語の話し言葉としてはむしろ冗長である場合もある（とくに事例a）。このように音声言語と手話と2つのモダリティ表現の特徴を同時に保持した不一致発話が見られるということは、幼児期にそれぞれのモダリティ別にまとまりを持った統語構造表現として学習される可能性を示唆していると結論された。

ただし、聴覚障害児の聴覚利用と手話環境には個人差が大きいことに留意する必要がある。また、文末の<自分>を意味する指さしが「主語」もしくは「行為主」なのか、「主題」なのか、はたまた<自分>を誇示する非統語的機能の現れなのかについては、事例をふやして検討していく必要がある。

<引用文献>

- ①武居渡・鳥越隆士（2000）聾児の手話言語獲得過程における非指示ジェスチャーの役割 発達心理学研究, 11, 12-22.
- ②澁谷智子（2012）バイモダル・バイリンガリズム ことばと社会, 14, 330-338.
- ③鳥越隆士（2009）スウェーデンにおけるバイリンガル聾教育の展開と変成：聾学校、難聴学校の教師へのインタビュー 兵庫教育大学研究紀要, 35, 47-57.
- ④Van den Bogaerde, B., & Baker, A. E. (2005) Code mixing in mother-child interaction in deaf families. Sign Language & Linguistics, 8, 151-174.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①瓜生淑子 2011 実践段階に入った聴覚障害児教育における手話の早期導入 奈良教育大学紀要（人文・社会科学）, 61(1), 57-67

②URYU, Y. 2014 Lying and Theory of Responses to a Deception Task. The Proceeding of the 16th European Conference of Developmental Psychology, 227-230

〔学会発表〕（計 2 件）

①URYU, Y. (2015) Bilingual Signed and Spoken Language Acquisition of Japanese 3-year-old Child. 17th European Conference on Developmental Psychology

②瓜生淑子 (2015) 手話と口話を併用する幼児のバイモダルな表現事例の検討 日本発達心理学会第26回大会

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瓜生 淑子 (URYU, Yoshiko)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20259469

(2) 研究分担者（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：